

## 野守は見ずや 君が袖ふる

— 古代双系社会と日本文学 —

吉田 賢右

あかねさす紫野行きしめの標野行き

野守は見ずや君が袖振る

春の明るい日差しの野で、ほら、野守（野の管理人）が見てるじゃないの、と気にしているふうではあるが、実はそれ以上に、別れたけれども今でも思いのある人が、自分に手を振ってくれるのがうれしい、という歌。

琵琶湖岸の大津京で即位したばかりの天智天皇が陽春の一日、蒲生野で薬草などを採集するピクニックを催したときに額田王めがたのおおきみが作った歌である。額田王は大海人皇子（天智の弟、後の天武天皇）の妻で二人の間には子供もできていたが別れて、今は天智天皇の愛を受ける人となっていた。ひさしぶりの再会に手を振っているのは大海人皇子である。

紫草むらさきのほへる妹を憎くあらば

人妻ゆゑに我恋ひめやも

皇子の返歌は、今でも思いがあるからこそ人妻であるあなたに手を振るのですよ、とこれもよろこんで恋情を伝える。

これは、天皇の思い人に対して、元夫とはいえ、みんなが見ているところで大胆にも恋のかけあいをする歌である。しかも、後ろめたさや暗いところはみじんもない。普通に考えれば決してゆるされないことが天皇の目前で行われている。そして、それが隠されることもなく、万葉集に収録され後世に伝わる。

この歌は、野遊びの後の宴会で余興として披露されたもので、言葉通りにうけとってはいけない、という解釈がある。そうだろうか。貴族王族たちは、天皇のいる場で、この歌を聞いては笑いざわめくことができたか。私は冗談ではすまない内容

だと思ってきた。

そう思ってきたのは、大和朝廷の構造は隋や唐と同じくアジア的専制国家だと私が思い込んでいたからである。このころ朝廷は隋や唐にくりかえり大使節団を送り、国家統治技術（律令制、官僚制）や仏教、文化を学び、取り入れていたのだから。しかし、最近、そうでもないことを知った。文明を成立させた中心（中国）に隣接する周辺国（朝鮮）は大帝国の制度や精神をそのまま受け入れたが、それよりもさらに外縁の亜周辺国（日本）はそこに先行する文化を土台にして選択あるいは修飾して取り入れて独自の文化を形成する機会があった（注1）。

日本では飛鳥時代から奈良時代にかけて八代六名の女帝が出現した（注2）。当時、帝（みかど）が没すると、群臣が集まり次の帝を選んだ。その際に、まずは亡くなった帝の（子供ではなく）キサキ（皇后、妃、嬪）、キョウダイ（兄弟姉妹）が候補となり、その中から、政事の経験を積んだ壮年の者が選ばれた（たとえば女帝の即位の時の年令は、推古39才、皇極49才、持統55才）。今までの歴史学では、これらの女帝は、適当な男性の候補がない間の中継ぎと考えられていたが、そうではない。女帝の治世は10年から30年間に及ぶ。それぞれに有能な積極的な統治者であった。直系男性に帝位を引き継ぐ父系制はまだ存在せず、男女ともに帝位につくことができたのである（双系制）。

驚いたことに、最近の発掘調査によると、飛鳥—奈良時代では、帝の住む内裏にはキサキのいる場所は無かった。つまり、皇后在所や後宮のような建物はなかった。複数いるキサキは、それぞれ王族女性として出身氏族の邸宅（ミヤ）に住んでいた。たとえば、聖武天皇の皇妃光明子のミヤは藤原不比等邸の一郭にあり、聖武天皇はそのミヤに行幸している。将来帝位につくかもしれない息子や娘もミヤで育てられた。ミヤはキサキとその子、出身氏族の活動拠点であり重要な権力基盤であったのだ。当然、キサキたちの独立性は強かった。

一緒に育てられたキョウダイの絆は強かったし、双系の社会での政治的な結集をはかるために近親結婚が繰り返された。背子（せこ、夫と兄弟の両義）妹（いも、妻と姉妹の両義）という不思議な言葉の社会的な背景にはそういう事情があったと理解できた。

以上は宮廷の話であるが、日本古代（古墳時代―奈良時代）においては一般社会でも親族結合は母系でも父系でもなく、双系制であったという（注3）。男女は同格で、多くの女性の首長がいた。私はまったく知らなかったが、初期の古墳に埋葬されている古代首長の半分近くが熟年女性だという（骨から、あるいは甲冑が副葬<sup>11</sup>男）。巫女的な首長ではなく行政的な首長であり子供もいたことは、多くの場合、残された骨盤に妊娠痕がみられることからわかる。単独で埋葬されていることが多いが、男女で埋葬されている場合でも夫婦ではなくキョウダイだという。男女は別に住居をもち、男が女のところに通う妻問婚が主流だったのだろう。男女は固定的な関係に強く縛られることなく離合し、婚姻のきずなよりもキョウダイなど血縁関係の方が強かったらしい。

これで初めてわかった。女性の独立性が強く、一方的で強迫的な貞節観念とは無縁の双系制の色濃い社会であれば、額田王と大海人皇子の歌のやりとり（関係）は、罪深いものではなく、人目について周囲の関心を引くことがあるとしても、おおらかに承認されるものだったのだ。

額田王の歌を収録している万葉集には、男女の愛の歌がたくさんある。女性を作者とする和歌も多い。歌は萎縮せずのびのびしている。この時代に女性が個人として恋の歌を詠みそれが文芸として価値あるものと認識されて記録され、今でも見ることができるといえるのは世界の他の地域にはないことのように思う。「和歌は本来、もののはれ、いろいろのみ、すなわち男女の仲のことを歌うのが基本であって、四季歌も、雑歌も、賀歌も、哀傷歌も、そのいはば延長や変奏という形でゆ

く」（注4）とすれば、和歌を生み出したのは、双系制の社会ということになる。

しかし、古代宮廷の雰囲気は徐々に変わっていった。双系制による皇位継承は、資格のある候補者が多く、帝位の代替わりのたびに、キョウダイや近親のあいだで陰惨な政争が繰り返され敗者となった御子・豪族が殺された（有馬皇子・大友皇子・大津皇子・長屋王・）。それを避けるために在位中の帝が、あらかじめ男子後継者を指名すること（立太子）が多くなった。キサキたちは内裏の中に住むようになった。それは日本に導入された父系制の中国法制が次第に浸透していく過程でもあった。朝廷の軍事的要素の増大も父系に傾斜する。また、双系制は、イエが労働と生産の場であるときに、適格的な仕組みであり、宮廷がその生産現場から遠く離れて時間がたつにつれ、双系的慣習が失われていったとも考えられる。

それでも、父系制が宮廷に定着した平安京時代でも、多くの女性が文化的に活躍できたのは双系制の記憶が生きていたからだろう。源氏物語では、光源氏は父である帝の妃と密通して子までなしている。フィクションとはいえ、帝位を傷つけ相対化するそんな設定が咎められることなく認められているのは、考えてみれば驚きである（注5）。

注1 カール・ウイットフォゲルの考え。柄谷行人もこのあたり詳しい（「世界史の構造」岩波書店）。

注2 「女帝の古代王権史」（義江明子著、ちくま新書）をおもしろく読んだ。そこには、私が知らなかった歴史の解析が紹介されていた。以下、これに多クたよって述べる。

注3 少し調べたら、原始母系制から中世父系制へ、という私の知識は前世紀のもので、古代日本の親族制は双系制だった、というのは今では学界の常識のようである。それでも今回、私が感心納得したのは、物理的な証拠でそれが裏付けられた（evidence-based）ことである。すなわち、初

期古墳の埋葬者の多くが女性であること、内裏の発掘によって妃の居住所や後宮にあたる建物が内裏には無かったことの発見である(原著論文に当たりたかったが文科系の原著はなかなか手が届かなかった)。

注4 丸谷才一「花火屋の大将」101ページ。

丸谷さんは、明治天皇と大正天皇の御製歌集から恋の歌が排除されているのを嘆いている。そんなことは明治までなかった。

注5 思うに、支配層では父系制が支配的になったが、双系制の記憶は社会の伏流として後代にも持続し、女性が喜怒哀楽を持つ人間として登場し男性との関係が展開するという題材が好まれる日本文芸の特質(中国文芸と比べれば瞭然)を生み出す一つの背景となってきたのではないか。古今和歌集、新古今和歌集、歌舞伎、浮世絵、近松門左衛門、井原西鶴、近代の私小説、など。